

参考文献リスト(2-4 気候変動による節足動物媒介感染症リスクの評価)

No.	著者(公表年)、文献名、学術誌名、巻(号)、ページ	概要	URL
1	桐谷圭治(2012)日本産昆虫、ダニの発育零点と有効積算温度定数:第2版.農業環境技術研究所報告 31, 1-74	日本産昆虫・ダニ505種の発育零点と有効積算温度定数の値を取りまとめた論文	http://www.naro.affrc.go.jp/archives/niaes/sinfo/publish/bulletin/niaes31-1.pdf
2	津田良夫ら(2008)都市環境におけるアカイエカの飛翔距離,第60回日本衛生動物学会大会	都市化された環境でアカイエカ成虫がどの程度の範囲を飛翔するかを調べた。得られた回帰直線の傾きと切片の値から最大飛翔距離を推定したところ1,217mであった。	https://doi.org/10.11536/jsmez.60.0.58.0
3	国立感染症研究所,わが国のデング熱媒介蚊であるヒトスジシマカの分布域拡大について	ヒトスジシマカは東南アジアを起源とするヤブカである。亜熱帯地域から温帯地域に徐々に分布域を広げるために、温帯地域で越冬する術を身につける必要がある。沖縄以南のヒトスジシマカは冬でも発育を停止することなく、1年中卵から成虫への生活環が回っている。一方、厳寒期(1~2月)の月平均気温が10℃以下になる九州以北の地域では、幼虫や成虫で越冬することが不可能で、卵のステージで10月~4月まで越冬する。ヒトスジシマカがいつの時代にわが国に移入されて来たのか明らかでないが、1910年に福岡で、また、1917年に東京での分布記録がある。その後、全国的な調査としては、1945~1950年にわたって、進駐軍がわが国の蚊の調査を詳細に行っている。その報告におけるヒトスジシマカの分布北限は栃木県で、当時、東北地方にヒトスジシマカは分布していなかった。その後、東北地方に分布する蚊の調査は数人の研究者によって行われており、上村(1968)は仙台で初めてヒトスジシマカを確認し1)、その後	http://idsc.nih.gov/jiasr/25/288/dj2888.html
4	駒形修(2017)気温上昇がヒトスジシマカの分布に与える影響.獣医畜産新報 70(6),413-417	ヒトスジシマカは年平均気温11℃以上の場所に分布しているが、北限の北上は気温上昇による分布域の拡大予測と良く合っていたことから、気温の上昇が主因であることが推察された。ネッタシマカは当期の気温が10℃以下になると越冬できなくなるが、仮に3℃の気温上昇があったとしても、冬季の気温が10℃を超える地域はほとんどないことから、定着の可能性は低いことが推察された。	https://cinii.ac.jp/naid/40021233240/
5	小林睦夫(2004)気候変化がウイルス媒介蚊の分布、生理、生態に与える影響.平成15年度環境省ヒートアイランド現象による環境影響に関する調査検討業務	年平均気温11℃以上を示すメッシュ気候図とヒトスジシマカの分布を重ねてみると、非常によく一致していたことが分かる。(ヒトスジシマカの発育ゼロ点が11℃である。)さらに、2℃以上気温が上昇すると東北地方の平野部全てで分布が可能になる。また、人口密度1000人/km ² 以上になるとより定着しやすいとも言える。各都市の11℃以上の日平均気温の日数と、積算温日数(ヒトスジシマカが一代に必要な積算温日数は350)から推定世代数を算定すると、山形市や秋田市では4~5世代となる。	https://www.env.go.jp/air/report/h16-04/index.html
6	E B Vinogradova(2000)Culex Pipiens Pipiens mosquitoes: taxonomy, distribution, ecology, physiology, genetics, applied importance and control, Russian Academy of Science	チカイエカ(アカイエカに近似した蚊)の発育零点、有効積算温度定数を分析した文献	https://www.nhbs.com/culex-pipiens-pipiens-mosquitoes-taxonomy-distribution-ecology-physiology-genetics-applied-importance-and-control-book
7	E Little et al(2017)Local environmental and meteorological conditions influencing the invasive mosquito Ae. albopictus and arbovirus transmission risk in New York City. Pros Neglected Tropical Disease 11(8)	ヒトスジシマカは米国北東部に分布する蚊の一種であり、咬傷やチクングニア熱の媒介等、公衆衛生上の重大な脅威となっている。本研究では、地域環境と気象条件がニューヨーク市におけるヒトスジシマカの繁殖に与える影響の定量化を試みた。統計モデルを利用し、高解像度のヒトスジシマカ繁殖危険度マップを作成し、2016年からの観測データに基づく時空間モデル予測の精度を確認した。その結果、ヒトスジシマカ個体数の経年変化としては分布域の変動が季節間変動より大きく、地域環境と気象条件が個体数に関連していることが確認された。	https://doi.org/10.1371/journal.pntd.0005828
8	M Kobayashi et al(2002)Analysis of Northern Distribution of Aedes albopictus (Diptera: Culicidae) in Japan by Geographical Information System, Entomological Society of America	ヒトスジシマカはデング熱を媒介する蚊で広く日本に分布し、本州北緯38~40度を北限とする。本研究では、北日本における本種の分布に影響を与える要因を、地理情報システム(GIS)を使って調査した。1998-2000年の間、東北地方の都市部・郊外26地点において、人工繁殖及び自然採取された本種の幼虫の調査が行われた。GISを使った気象学的分析により、ヒトスジシマカの現在の分布における以下の要因が特定された。(1)年間平均気温が11℃以上、年間最低気温(1月)が-2℃以上であること(2)11℃以上の気温が186日間以上継続すること(3)気温11℃(ヒトスジシマカの発育零点に近似すると推定される)の観測初日から起算した積算気温が1350℃以上となること等である。	https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/11931270
9	N Nihei et al(2014)Geospatial analysis of invasion of the Asian tiger mosquito Aedes albopictus: competition with Aedes japonicus japonicas in its northern limit area in Japan. Geospatial Health 8(2), 417-427	ヒトスジシマカは東南アジアを起源とし、近年において世界的に分布を拡大している蚊である。日本においては2000年に山形市において初めて確認された。それ以前はヤマトヤブカのみが同市で採集されていたが、2年後にはヒトスジシマカの個体数が増加し、幼虫の80%以上が同種のものであったとみられる。山形市の新興住宅地で繁殖しているヒトスジシマカと比較すると、原生のヤマトヤブカの分布は市街地に留まっているが、生息域は植性指数の高い周辺山岳地帯に近い場所にある。本研究では、山形市における両種の分布に影響する要因を、現地調査、空撮写真、衛星写真、デジタルマップに基づく地理情報システム(GIS)を用いて調べた。	https://doi.org/10.4081/gh.2014.30

10	O Komagata et al (2017) Predicting the start of <i>Aedes albopictus</i> (Diptera: Culicidae) female adult biting season using the spring temperature in Japan, <i>Journal of Medical Ecology</i> 7;54(6):1519-1524	ヒトスジシマカ(一筋縞蚊)(双翅目:糸角亜目カ科)は日本に広範に分布する蚊である。四月から六月にかけて雌の成体による咬傷が活発化するが、南方亜熱帯では通年活動している。ヒトスジシマカによる咬傷が発生する日は地域・年ごとに多様であり、推定は困難である。本研究では、数年間にわたり国内の温暖・寒冷地域を含む複数の地点で本種の調査を行った。その結果、春季気温とヒトスジシマカの咬傷発生初日の関連性が確認された。四月の気温、続いて三月の気温が春季における最も強い関連性を示した。これらのデータに基づいた簡易式により、国内の様々な地域における咬傷発生初日を推定することが可能になり、予報マップを作成した。その結果、ヒトスジシマカによる咬傷発生初日は早春の気温により変動することが確認され、年ごとに約20日の違いがあることがわかった。	doi: 10.1093/jme/tjx159
11	石畝史ら(2012)福井県奥越地区におけるマダニ分布調査—1991年と2011年の比較。福井県衛生環境研究センター年報(11)	福井県内のマダニ類の分布状況については、1991年に14地点において調査を実施し、北方系と南方系のマダニ類が交錯して生息していることが確認された。そこで、初回の調査から20年後にあたる2011年に、取立山および法恩寺山で以下の口種類のマダニ種に注目して調査を実施し、20年間のマダニ分布相の変動を調べた。	http://www.erc.pref.fukui.jp/center/publish/report/2012/4-2.pdf
12	国立感染症研究所(2015)感染症を媒介する節足動物の分布・生息域の変化、感染リスクの把握に関する研究 平成24-26年度。厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)	マダニ類は主として山林に生息する感染症媒介動物である。一方で、市街地でのマダニ人体刺症も少なからず報告されているため、マダニ水は市街地にも生息すると考えられる。しかし、我が国の市街地におけるマダニ類の調査はほとんど行われた例がなく不明な点が多い。そこで、富山県の市街地においてマダニ類の調査を実施した。本調査結果から、市街地の公園と河川敷もマダニ類は広く分布すると推測された。	https://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/NIDD00.do?resrchNum=201318029A
13	小林睦生(2013)マダニ媒介性感染症の新顔「重症熱性血小板減少症候群SFTS」とは—なぜこのような感染症が出現してきたのか?— <i>Pest Control Tokyo</i> (65) 31-36	2009年に中国で初めて流行が確認された重症熱性血小板減少症候群(SFTS)は、米国でも同様のウイルスによる症例が報告され、日本では2012年に、原因不明の疾患で亡くなった患者の血清からウイルスが検出された。我が国の患者総数は2013年6月上旬で24名に達し、2005年からの累積で10名が死亡している。ウイルスはタカサゴキララマダニともう1種のチマダニから検出されているが、今後の詳細な調査でよりその他のマダニからもウイルスが検出される可能性がある。患者の居住地周辺の環境に関する情報は、一切公表されていないが、住宅が密集した都市部ではなく、山間部が隣接している地方都市での患者発生が強くうたがわれる。根拠は、SFTSの自然宿主がシカ、イノシシなどの大動物の可能性からである。近年、全国的にシカの生息密度が異常に高まっており、これらの自然環境とマダニとの関係が新たなウイルス感染症の流行に関係している可能性が示唆されている。	http://www.pestcontrol-tokyo.jp/img/pub/065r/065-7.pdf
14	山内健生(2011)マダニ類の調査法とその実践例。ペストロジ—26	蚊類やゴキブリ類などの衛生昆虫と異なり、マダニ類の調査や同定の方法に関する情報は少なく、具体的な方法はあまり知られていない。そこで、著者の経験を踏まえてマダニ類の調査・採集方法と同定方法について解説する。	https://iglobaljst.go.jp/detail?JGLOBAL_ID=201102253732465303&rel=0
15	山内健生ら(2010)タカサゴキララマダニによる人体刺症の5例。日本ダニ学会誌19(1),15-21	タカサゴキララマダニ人体刺症の5例を記録した。感染地域は、兵庫県、岡山県、山口県、福岡県、および宮崎県であった。本報告で、タカサゴキララマダニ人体刺症が岡山県で初めて記録された。マダニが保有する可能性がある病原体についてDNA検索を行なったが、ボレリア、エーリキア、アナプラズマ、リケッチアのすべてが検出限界以下であった。	https://doi.org/10.2300/acari.19.15
16	山内健生、高田歩(2015)日本本土に産するマダニ科普通種の成虫の図説。ホシザキグリーン財団研究報告18, 287-305	本図説では、日本本土において、フランネル法あるいは中・大型哺乳類の体表の調査により採集されやすいと考えられる18種の成虫について、総合合わせによる同定ができるよう、実物写真と種の識別点を示した。	https://www.niid.go.jp/niid/images/ent/PDF/2015yamauchi_ticks.pdf
17	山内健生、中谷友美(2016)富山県における2010年以降のマダニ人体刺症10例、特にタカサゴキララマダニ症例に注目して。衛生動物67(4),239-242	2010~2015年に富山県で経験したマダニ人体刺症10例を報告した。それらの内訳は、ヒトツゲマダニ3例、タカサゴキララマダニ2例、およびキチマダニ、ヤマトチマダニ、フタゲチマダニ、ヤマトマダニ、シュルツエマダニがそれぞれ1例ずつであった。これらのうち、ヤマトチマダニによる1例は、北海道で刺咬されたものと推定された。今回2例を報告したタカサゴキララマダニによる人体刺症は、富山県では1976年に1例が確認されて以来の症例である。富山県では、近年のイノシシの定着にともなって、イノシシと関係の深いタカサゴキララマダニによる人体刺症が発生していると考えられる。	https://doi.org/10.7601/mez.67.239
18	D Vlasta(2008)Tick-borne encephalitis virus expansion to higher altitudes correlated with climate warming. 298(1), 68-72	クルコノシェ山脈の1961-2005年間の気象データによると、年間平均気温は1.3-1.4℃と顕著な上昇が見られ、五月から八月の間では2-3.5℃上昇している。平均温度勾配を0.6℃/100mとすると、2℃の変化は300-350mの標高差に相当し、3.5℃の変化は550-600mの標高差に相当するため、20年前にクルコノシェ山脈で確認されたイヌダニの分布域の環境条件と適合する。	https://doi.org/10.1016/j.ijmm.2008.02.005

19	Elisabet et al (2000) Impact of Climatic Change on the Northern Latitude Limit and Population Density of the Disease-Transmitting European Tick Ixodes ricinus. Environmental Health Perspectives 108(2), 119-123	本研究では、1980年代初頭から1990年代中旬のスウェーデンにおける気候変動と、病害虫イヌダニの分布北限の拡大及び個体数密度の増加の関連性について調査した。1980年代初頭から1990年代中旬にかけて、中部・北部スウェーデンにおけるイヌダニの成長可能な最低気温の閾値を上回る年間日数と、イヌダニ個体数密度には関連性が認められた。1990年代は1980年代より全ての調査地点において冬季の温暖化が認められた。調査の結果、イヌダニの分布北限の拡大は冬季の最低気温が-12℃を下回る日数の減少と関連していることがわかった。高緯度帯では冬季の低温がイヌダニ分布に明確な影響を与えていた。南寄りの調査地点では、冬季の温暖化(最低気温-7℃以下の日数の減少)と春季・秋期の拡大(最低気温5~8℃以上の日数の増加)がイヌダニ個体数密度の増加に関連していた。	doi: 10.1289/ehp.00108119
20	J Matema et al (2005) Altitudinal distribution limit of the tick Ixodes ricinus shifted considerably towards higher altitudes in central Europe: results of three years monitoring in the Krkonose Mts. (Czech Republic). Central Europe Journal of Public Health 13(1)	本研究はイヌダニのクルコノシェ山脈(チェコ共和国)における垂直分布の現状を調べ、分布変動の可能性を検討する。	https://pdfs.semanticscholar.org/6efc/9c4c8712be04bf79d0a524dc0ec87a76cde2.pdf
21	N Yamaguchi et al (1971) Tick of Japan, Korea, and the Ryukyu Island. Brigham Young University Science Bulletin, Biological Series, 15(1)	日本国内、韓国に生息するマダニの種類について調査・分析をした文献	https://scholarsarchive.byu.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1066&context=byuscib
22	WHO (2006) Lyme borreliosis in Europe: influences of climate and climate change, epidemiology, ecology and adaptation measures	ストックホルム大学とWHOは共同で、欧州委員会の出資による事業(EVK2-2000-00070)の中で、欧州の気候変動がライム病に与える影響・適応についての調査を行った。1980年代から病原菌を媒介するダニの個体数密度は増加し、高緯度帯および高山帯の分布は拡大している。将来的な欧州の気候変動によりライム病の高緯度帯および高山帯における拡大は容易になり、発症の増加が予測される。一方で、高温と乾燥が進む地域では、ライム病は消滅すると予測される。	http://www.euro.who.int/_data/assets/pdf_file/0006/96819/E89522.pdf
23	Z Petr and B Cestmir (2004) A tick-borne encephalitis ceiling in Central Europe has moved upwards during the last 30 years: Possible impact of global warming?. International Journal of Medical Microbiology Supplements 293(37), 48-54	1970年以降のチェコ共和国におけるダニ媒介性脳炎(TBE)の地域・季節間の発生パターンを分析し、温暖化による影響を調査した。地理情報システムを使い、8700件を超える発症地点をマップ上に特定し、デジタル標高モデルを用いて症例の垂直分布推定を行った。各年の分布域の限界(発症地点の標高の最大値もしくは標高上位5-10件の平均値)を帰無仮説により検証し、関連する要因(経年TBE発症件数、年平均気温、齧歯類およびノロジカ個体数密度)との相関性を分析した。	https://doi.org/10.1016/S1433-1128(04)80008-1
24	今井長兵衛, 2004. ウエストナイルウイルスの日本への侵入可能性と対策, 生活衛生 48(6) 341-352	ウエストナイルウイルスの日本への侵入の可能性、想定される侵入経路と侵入防止策、不幸にして侵入した場合の日本産野鳥の増幅幅としての重要性、想定される主要媒介蚊の形態や生態、蚊に刺されないための工夫、家庭や事業所での媒介蚊対策、公共的な蚊発生源に対する地域での取り組みなどを紹介した。	https://www.istage.ist.go.jp/article/seikatsueisei/48/6/48_6_341/.pdf
25	鳥海重喜・稲川敬介(2017) 東京オリンピック開催時の宿泊需要予測, オペレーションズ・リサーチ	2020年の東京オリンピックの開催期間中における観戦客の宿泊需要を予測する。まず、Web予約を主体としたある旅行会社が取り扱っている宿泊施設のデータを利用して、競技場ごとに宿泊施設へのアクセシビリティを評価する。次に、首都圏在住者も含めたすべての観戦客の競技場への移動需要を予測する。さらに、観戦客が連泊することを想定したうえで、宿泊需要を招致委員会の立候補ファイルに基づいて予測し、現在の宿泊施設が供給できる量を踏まえて、宿泊に関する需給バランスを評価する。	http://www.orsj.or.jp/archive2/or62-1/or62_1_15.pdf
26	津田良夫 (2017) 鳥マラリアと媒介蚊に関する最近の研究, 衛生動物68 (1) 1-10	ウエストナイルウイルスの日本への侵入の可能性、想定される侵入経路と侵入防止策、不幸にして侵入した場合の日本産野鳥の増幅幅としての重要性、想定される主要媒介蚊の形態や生態、蚊に刺されないための工夫、家庭や事業所での媒介蚊対策、公共的な蚊発生源に対する地域での取り組みなどを紹介した。	https://doi.org/10.7601/mez.68.1
27	Andrew J. Monaghana et al (2016) Climate change influences on the annual onset of Lyme disease in the United States, Ticks Tick Borne Dis. 2015 July ; 6(5): 615-622.	ライム病は米国における最も一般的な媒介性感染症である。ライム病の発生は季節間で大きく異なり、春季の症例の発生はその前の月々の気象条件に左右される。米国における各年のライム病発生週間に21世紀の気候変動が与える影響について、5つの全球気象モデルと4つの温暖化ガス排出シナリオをダウンスケーリングした気象モデルを用いて予測した。90%以上の症例が発生する東部12州の州別・全体予測を行った。ライム病発生週間の各年の全国平均は2025~2040年で2.8~3.5日早期化すると予測され(95%信頼区間)、2065~2080年では4.9~13.3日早期化すると予測された(99%信頼区間)。温暖化ガスの排出が最も大きいシナリオで、最も早期化が進むことが予測された。南寄りの中部大西洋岸の州では、北東部と比較して2065~2080年で7~24.5日の早期化、中西部北部の州では1.4~16.1日の早期化が予測された。	doi: 10.1016/j.ttbdis.2015.05.005

28	Hiroshi Yoshikura (2018). Seasonality and Geographical Distribution of Tsutsugamushi Diseases in Japan: Analysis of the Trends since 1955 till 2014. Jpn. J. Infect. Dis., 71, p.1-7.	1955～2014年の日本におけるツツガムシ病(TD)の発生地点と季節性に関するデータを収集した。1960年代中旬に旧型のツツガムシ病が消滅して以来、長期間の小康が続いていたが、1975年には10月～12月間に南日本において、続いて1979年には5月～6月間に北日本において発生が確認された。現在のツツガムシ病は季節性と地域性により3つの種類に大別される。南日本における10月～12月の大流行と5月～6月の小規模な発生、北日本太平洋側における5月～6月の大流行と10月～12月の中規模な発生、そして北日本日本海側における5月～6月の大流行と10月～12月の小規模な発生である。また、日本各地で年間を通して小数の症例が確認されている。これらの流行パターンがどのようにできたのか考察する。	https://doi.org/10.7883/voken.JJID.2017.073
29	Howard J. Kilpatrick et al (2014) The Relationship Between Deer Density, Tick Abundance, and Human Cases of Lyme Disease in a Residential Community, J. Med. Entomol. 51(4): 777-784	オジロジカ (<i>Odocoileus virginianus</i> Zimmerman) はライム病、バベシア症、ヒト顆粒球アナプラズマ症を媒介するマダニ (<i>Ixodes scapularis</i> Say) の成体を媒介する。本研究では、コネチカット州の調査地区で、オジロジカの個体数密度、マダニ個体数、ライム病の発症件数の関連性を13年にわたり調査した。1995～2008年の間、地区に定住する住民の90～98%を6回にわけて調査し、住民のマダニ関連の疾病への曝露とオジロジカの出没頻度との関連性を調べた。オジロジカの駆除開始から、調査地区のオジロジカ出没件数・頻度は大幅に減少し、住民のライム病発症件数も同様に減少した。100世帯当たりのライム病発症件数とオジロジカの個体数密度には強い相関性が認められた。オジロジカの個体数密度を1平方キロメートルあたり5.1頭まで減少させることにより、マダニ個体数は76%減少、病害虫危険指数は70%減少、住民のライム病発症件数は80%の減少が認められた。	https://deeradvisor.dnr.cornell.edu/resource/relationship-between-deer-density-tick-abundance-and-human-cases-lyme-disease-residential
30	Igor Dumic and Edson Severnini (2018) "Ticking Bomb": The Impact of Climate Change on the Incidence of Lyme Disease, Canadian Journal of Infectious Diseases and Medical Microbiology	年平均気温の2℃上昇(NCA4の2036～2065年予測)により、米国におけるライム病発症件数は将来的に20%増加すると予測される。これらの予測により、屋外活動時の危険に対する医療関係者、公共衛生関係者、政策決定者の対応力向上及び一般市民の意識向上が期待される。	https://doi.org/10.1155/2018/5719081
31	J. SETO et al (2017) Meteorological factors affecting scrub typhus occurrence: a retrospective study of Yamagata Prefecture, Japan, 1984-2014, Epidemiol. Infect., 145, 462-470.	気候変動は病原菌媒介者の生態への影響により、媒介性感染症の発生に影響を与える可能性がある。本研究では、国内の気象条件がツツガムシ病(ツツガムシ病リケッチア細菌による人獣共通感染症)の発生に与える影響について調査する。1984～2014年の山形県における気象条件(気温、降雨、降雪)と春季・初夏のツツガムシ病の発生との関連性を負の二項分布を用いて分析した。前年7月と8月の平均気温、前年9月の積算降水量、冬季の降雪量、1月と2月の最大積雪深とツツガムシ病の発生件数との間には正の相関性が認められた。それに対し、前年7月の積算降水量との間には負の相関性が認められた。	https://doi.org/10.1017/S0950268816002430
32	Kimiko OKABE et al (2018) Tick predation by the pseudoscorpion Megachernes ryugadensis (Pseudoscorpiones: Chernetidae), associated with small mammals in Japan Journal of the Acarological Society of Japan 27(1) 1-11.	本研究では、オオヤドリカニムシによるダニの捕食を研究室で初めて観察した。オオヤドリカニムシの成虫および第三若虫を野生のアカネズミから採集し、ペトリ皿に移した。これらのカニムシによるオオトゲチマダニの幼虫・蛹・成虫の捕食が認められた。カニムシのほとんどが2～3体のマダニ幼虫を初日に捕食した。	https://doi.org/10.2300/acari.27.1
33	Yoshikura Hiroshi (2017) Geographical Distribution of Japanese Spotted Fever and Tsutsugamushi Disease in Japan - Possible Effect of Environmental Temperature, Japanese Journal of Infectious Disease, 70, 349-351	本研究では、外気温が日本紅斑熱とツツガムシ病の地理的分布に与える影響について調査する。	https://doi.org/10.7883/voken.JJID.2016.274
34	岸本寿男ら (2015) 我が国におけるダニ媒介性感染症の多様性, 日本内科学会雑誌104(9), 2011-2019	多様化するダニ媒介性感染症のうち、リケッチア感染症とSFTSを中心にトピックスや疫学の現状と課題、対策について述べる。	https://doi.org/10.2169/naika.104.2011
35	吉住正和ら (2017) 疫学検討から見た群馬県と利根沼田2次保健医療圏におけるつつが虫病の特徴, 北関東医学 67, 23-31.	アカツツガムシを媒介としたつつが虫病は旧来より知られていたが、1950年代から新型(タテツツガムシあるいはフトゲツツガムシが媒介)が出現して全国的に拡がり、群馬県でも1980年代から北部山間部を中心に散見されるようになった。一方、最近の群馬県におけるつつが虫病の発生状況は明らかとは言えない。本研究では、群馬県、特に利根沼田2次保健医療圏における最近のつつが虫病の発生動向とその変遷などの特徴を明らかにすることを目的とする。	https://doi.org/10.2974/kmi.67.23
36	松浦友紀子 (2018) 札幌市街地周辺におけるエゾシカのスポットライトカウント調査, 「森林総合研究所研究報告」(Bulletin of FFPRI) Vol.17 No.2 (No.446) 149 - 154	札幌市では近年市街地へのシカの出没が問題となっている。北海道農業研究センターの構内においてもシカの目撃が増加しており、市街地に出没するシカの生息地になっている可能性がある。そこで、当センターにおけるシカの生息状況を把握することを目的としてスポットライトカウント調査を実施した。調査は2010年から2016年に40回行い、1,675頭のシカを確認した。 市街地に近いところでシカ密度が高くなることは、人獣共通感染症の感染拡大を引き起こす可能性がある。とくに、近年発症が報告されているダニ媒介性脳炎(TBE)や重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の原因ウイルスを持つマダニはシカにも寄生し、北海道では2016年にTBEによる死亡例が発生している(国立感染症研究所 2017)。SFTSは現在のところ症例が報告されているのは西日本に限られてはいるものの、北海道でもウイルスが検出されている(国立感染症研究所 2016)ことから楽観を許さない。	https://doi.org/10.20756/ffpri.17.2_149

37	前田健 (2016)「重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) をはじめとするマダニ媒介性感染症の現状」特集2『病気を媒介する衛生動物とその防除』; 学術の動向 (日本学術協力財団) 21(3): 67-71.	我々は、野生動物を中心にSFTSVの感染状況の調査を実施してきた。ある地域では、2007年からこれまでに2,000頭近くのアライグマにおけるSFTSVに対する抗体保有率を調査した。その結果、図に示すように、抗体保有率が急激に上昇しており、2015年には50%を超える陽性率となっている。原因は分かっていないが、この地域では、2008年以降急激にSFTSVが拡大していることが分かる。この地域では、2014年にSFTS患者が初めて報告されている。これらの結果から、1)間違いなくSFTSVが拡大している地域が存在すること、2)野生動物で蔓延しているSFTSVがヒトに感染することが判明した。すなわち、西日本だけと考えられているSFTSの発生が、今後、東日本に広がる可能性、ヒトで患者が出た地域では既に野生動物でSFTSVが蔓延している可能性、が否定できない。	https://www.istage.ist.go.jp/article/tits/21/3/21367.pdf
38	太田龍一 (2017) 鳥根県雲南市における日本紅斑熱の初報告とその広がりに関する考察, 日農医誌 65(5) 1019~1022	鳥根県雲南市で発生した日本紅斑熱の症例を経験した。症例は77歳女性で、全身倦怠感を主訴に受診した。当初、発熱と皮疹、ダニの刺し口の痂皮からツツガムシ病と診断し加療していたが、痂皮のPCR法でRickettsia japonica が陽性となり、日本紅斑熱の確定診断となった。雲南市における日本紅斑熱の初めての症例である。鳥根県内では北部から南部への日本紅斑熱罹患者の拡大が観察されているが、これは媒介動物であるイノシシ移動とともに起こるRickettsia japonica をもったマダニの生息域の拡大によるものと考えられ、今後イノシシの生態調査が望まれる。	https://doi.org/10.2185/jirm.65.1019
39	朝野和典 (2017) 新興感染症としての重症熱性血小板減少症候群 (severe fever with thrombocytopenia syndrome, SFTS) 診断のための疫学情報, 日集中医誌, 24:531-3.	SFTSの疫学と自然界での分布など、臨床現場でSFTS患者を疑うために必要な疫学情報について整理して解説する。	https://doi.org/10.3918/jsicm.24.531
40	壁谷英則ら (2016) 野生動物の食用利用と人獣共通感染症 日本獣医師会雑誌, 69(5), 277-283	猪や鹿から人に感染する可能性のある人獣共通感染症の一部について、過去に発生した事例やこれらの動物の各種病原体保有状況について解説する。	https://doi.org/10.12935/jvma.69.277
41	国立感染症研究所 (2017) デング熱・チクングニア熱媒介感染症の対応・対策の手引き 地方公共団体向け	国内感染症例を早期に探知し、早期の対応を行うことにより新規の症例発生を防止するために、管理者、市町村、都道府県等(等は保健所設置市及び特別区を含む)が実施すべき事項をまとめたものである。	https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10906000-Kenkoukyoku-Kekkakukansenshouka/270428.pdf
42	国立感染症研究所 (2014) デング熱国内感染事例発生時の対応・対策の手引き地方公共団体向け (第1版)	デング熱患者の国内感染事例が確認された場合の地方自治体等による積極的疫学調査とその対応法をまとめたものである。	https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10906000-Kenkoukyoku
43	国立感染症研究所 (2019) 蚊媒介感染症の診療ガイドライン (第5版)	医師がデング熱、チクングニア熱及びジカウイルス感染症などの蚊媒介感染症を診断し、確定した症例について直ちに届出を行うことができるよう、疫学、病態、診断から届出、治療、予防に至る一連の手順などを示したものである。	https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000146483.pdf
44	岡山県福祉部健康推進課 (2018) 蚊防除対策ガイドライン～蚊にお困りではないですか?～	交流のグローバル化が進んでいるため、海外のデング熱やジカウイルス感染症等蚊媒介感染症流行地域から帰国した者が発症することや、ウイルスを保有した者が日本を訪れることで、蚊が媒介するウイルスが国内に流入する可能性が指摘されていることから、多くの人が訪れる施設において、平成27～28年度、蚊防除のための調査等を行い、その成果として、具体的な防除の方法を示したガイドラインを作成しました。	https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/515811_3922198_misc.pdf
45	東京都 (2017) 東京都蚊媒介感染症 行動計画	都が取り組むべき感染症媒介蚊対策をはじめ、区市町村、保健所、医療機関、施設管理者等の関係機関、都民が取り組むべき対策を提示している。	https://www.metro.tokyo.lg.jp/INET/KEIKAKU/2015/06/DATA/70p6n101.pdf
46	厚生労働科学研究費補助金 新興・再感染症研究事業, ウエストナイル熱媒介蚊対策に関するガイドライン	本ガイドラインは、各地方自治体での媒介蚊対策の実施における問題点を明らかにしつつ、WNV(ウエストナイルウイルス)の侵入が確認された場合を想定した媒介蚊防除対策の指針を示すことを目的に作成された。WNVが検出されない段階から各地方自治体において媒介蚊の調査体制を構築すること、また、野鳥や患者からWNVが検出された場合には遅滞のない媒介蚊対策を実施することが強く求められる。また、地方自治体の保健所等に所属し、今まで媒介蚊対策に全く従事した経験のない担当者にも理解できるように、WNVの感染環、基本的な防除の考え方、防除の行程、実際の防除法をまとめた。	https://www.niid.go.jp/niid/images/ent/PDF/entwnf.pdf
47	厚生労働科学研究費補助金 新型インフルエンザ等 新興・再感染症研究事業, チクングニア熱媒介蚊対策に関するガイドライン	チクングニア熱が我が国に入ってきた場合を想定し、チクングニア熱媒介蚊対策のガイドラインを作成し、平常時からの媒介蚊対策の重要性を喚起することを目的とする。	https://www.niid.go.jp/niid/images/ent/PDF/chikungunya.pdf

48	福井県(2016) 福井県蚊媒介感染症予防指針	福井県蚊媒介感染症予防指針は、国の指針を基に、平時から感染症を媒介する蚊の対策を行うこと、国(県)内において蚊媒介感染症が媒介蚊からヒトに感染した症例(以下「国(県)内感染症例」という。)を迅速に把握すること、発生時に的確な媒介蚊の対策を行うこと、蚊媒介感染症の患者に適切な医療を提供することなど、蚊媒介感染症対策について、発生段階別に本県の方針をまとめたものであり、輸入感染症例を発端とするヒト→蚊→ヒトの感染環を絶つことで、蚊媒介感染症の県内発生の予防とまん延の防止を図ることを主たる目的とする。	https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/kenkou/kansensyoubu-denngunetu/mosquito-borne_infection_d/fil/fukui_guide.pdf
----	-------------------------	--	---